

會



報

1961年4月

214

日本山岳会

AACK 三十周年記念祝 賀会に出席して

三田 幸夫

旧暦十二月十八日、京都の学友会館で、AACK（京都大学学士山岳会）の三十周年記念祝賀会が催され、僕は日本山岳会を代表して出席する機会を得た。

桑原武夫会長、西堀栄三郎前会長のあいさつ、京都大学平沢総長の祝辞について、来賓側からは、僕と津田周二日本山岳会関西支部長、それに同志社大アビ登山隊長津田康祐氏が立ってお祝いのことばを述べた。

会場正面には、物故会員十数名の名がかかげられ、参会者一同黙とうののち、その人たちの親しい友人が交々立って、故人たちの隠れた逸話などを披露した。そのなかには僕自身もよく知っていた人もあったので、感無量であった。が、特に感を深くしたのは、そのなかで山の遭難による物故会員が、わずか二名にすぎないことであつた。

○ AACKの長年にわたる数々の探検や登山の栄光ある歴史に徴

し、このはなはだ少ない犠牲者の数は、なにを物語るものであろうか？ AACKの企劃がいつも積極的で大胆なものであつたのにかかわらず、それは慎重にして完全に近い行動に終始したことの証左であつたといえるだろう。西堀君もそのあいさつのなかで謙虚にこの点に触れていたが、まさに同感で敬服の至りである。

○ 酒戸隊長のパミール高原の講演は、スライドの美しさと、同氏の軽妙な話しぶりが、あまり学問的な退屈さを感じさせず、はなはだ面白かつた。ことに同じ目標、"ノシャック"に向う物力数倍のポーランド登山隊と邂逅し、協同登攀の申込を受けてキャンプを進めてゆく隊長、隊員たちの複雑な心理描写を、酒戸氏が淡々として語ってゆく最後の場面は、聴衆に特異な興味を抱かしたにちがいない。

登頂の場面は、スライドが間に合わなかつたのはなはだ残念であつたが、登頂者岩坪君の訥々（とつとつ）たる話しぶりには、かえって実感と切実な迫力があつた。帰路七千メートルの高距でのクレバスのなかのビバーク、天候が悪化すればはなはだ危険な状況であつたかもしれない。が、アン

ナブルナのフランス隊の帰路におけるような悪条件下のビバークの惨めさがなくて、至極明るい。

仲間は二人きりなのに、いつももう一人の隊員がいっしょにいるという幻覚につきまとわれたという話など、少々うす気味悪い。いずれ機を得て、当時の模様をひざを交えてゆっくり聞きたいものと思つてゐる。

○ スライドによる講演が終つて、ビールパーティになる。僕と同じテーブルの、ご老体の並河教授がいつもグラスを空にしておられる。大戦中、シンガポールの植物園でときどきお目にかかつた郡場寛先生（AACK初代会長）の亡くなられるまでのお話を伺つて、はなはだなつかしかつた。

だれかのグラスがあげられて、「ノシャック万才！」の聲がある。つゞいて「ヒマルチュリ」の「アビ」のプロジクト。そして最後に「AACK」への乾盃！

などやかな、しかしなにか興奮に満ちた、楽しいこの会合は、いづ果てるとも思えなかつた。そして僕は途中から、少数の幹部の人たちに伴なわれて、ある料亭の一室に案内された。

寒い日本間は、追々集まってきた十人ばかりのいきれと、小さ

なストープとでたちまち暖まつていった。

○ 桑原、今西、西堀、四手井、多田、今西（寿）、酒戸、加藤（泰）、工業の諸君たちの顔がそろつた。この部屋に似合しからぬジョニーウォーカーの栓が抜かれ、美しい給仕の人も加わつて席は次第にぎやかになり、活気を呈してきてた。

○ ここに集まる人たちは、AACKの歴史を作り、さらにその輝かしい未来をも創りつつある人々のグループである。カラフト、白頭山、興安嶺など初期の遠征から、マナスルへの道を開き、カラコラム、ヒンズークシといった。僕たちのあこがれの夢であつた領域にまで足跡を残してくれた。

そしてチョゴリザを、ノシャックをものにした。AACKの不滅の記録であると同時に、日本登山界の実力を国外にまで示したものとええよう。一つの大学の登山遠征団体として、この短い期間にかくも輝かしい記録を残したものは、各国の間にもその例ははなはだ少ないであらう。

西堀君たちの作詞といわれる「雪山讃歌」が合唱され、客人の僕のために慶応山岳部の「守れ権現」が唄われた。

歌の合間には、過去の登攀についての反省や討論が交わされ、今後の計画についても盛んな論争が闘わされた。僕自身も、その頃、すでに客人の立場にあることを忘れ、仲間の一人として振舞っていたような失礼さを、あえてしていたようだ。

○

実はこの会の前後、AACCKでは今度の新しい二つの遠征計画が真剣に討議されていることを僕は知らされていた。ビールパーティ

の、グラスを持った梅棹君が僕のところにやってきて、新しい動きの一つについて熱心に話していたことを思い出す。その梅棹君が、谷君と遅れてこの席に現われた。そして彼等の計画について、先輩間に激烈な議論が闘わされはじめた。若手の連中は他の会場で、その討議を夜半まで続けていたというのを、あとで聞かされた。

結局新計画が、ビルマ北境の最高峰カカル・ポラージに決まったことは、すでに新聞に発表されたとおりだから、ここに述べる必要も余剰もないが、この夜の激しい真剣な動きを見て感無量であった。いつも新しい境地に向う若さと、活々とした気力とに溢れたAACCKの人たちに対して、限らない敬愛の念を禁じ得ない。

○

僕は山岳会報の編集部から、AACCK三十周年祝賀会に出席した報告を依頼されたわけだが、書いていこううちにどうも僕のあまりにも個人的な感に偏りすぎた報告になってしまったきらいがないでもない。しかし、AACCKの人たちも、読者も、また僕自身も同じ会の山仲間であることによって諒とされたい。

(一九六一・一・一二)



ヒマラヤ便り

チャールズ・S・
ハウストンとオー
テンバーガー

吉沢 一郎

チャールズ・S・ハウストンが
この秋(一九六一年)十一月頃、

数週間の予定で、両親、奥さん、娘さん(単数)と一緒に日本を訪問するという手紙を寄こした。彼の便りの中には、こんなことが書いてあった。

私も度々ヒマラヤのことを思っています、相当経たねば行く暇はできないでしょうし、その時になれば年をとり過ぎていて登れはしないでしょう。もっとも、ここコロラドのアスペンで来年(一九六一年)あたり高緯度研究所が出来る可能性もあるので、ことによったらそのためにヒマラヤへ行く機会もないではありません。しかし、まずまず望みは薄いでしょう。このごろは殆んど実験室で、人工心臓その他の研究をやっております。

伊藤洋平さんにシャトルで会い、その後可愛い仏像を送って貰いましたが、それがいま、私の書斎の暖炉の上にかかっています。来年はぜひお目にかかりたいものです。

(註) この手紙は諏訪多栄蔵氏の編著、「ヒマラヤン・ジャーナルのインデックス」を送ったことに對する返事の一部である。

次に、L・オーテンバーガー(AAJ、一九六〇年参照)がバール氷河にいるヒラリー隊に参加

するため、アメリカから東京、香港經由ネパールへ向った。偶々、コルディエラ・ブランカのことで経験の深い彼と文通していたN君のところへ、前記の用件のために東京に立寄るといふ連絡があったので旨く会えたわけだ。

東上線下赤塚の睦住宅30Aにあるアイゼンホート大尉の家にワラジをぬいでいたオーテンバーガー夫妻を訪ね、ア大尉一家の人や近所のアメリカさん達と一緒に、プランカとアメリカのグラン・ティートン(と発音していた)の岩登りのスライドを見せて貰った。奥さんのイレエヌさんの達者な登攀ぶりに驚く。

御主人は三十一才、奥さんの年は儀礼上きかなかったが二十四、五才かな、可愛らしいお嬢さんといった方がピッタリする。プランカへも一緒にいって登っているし、今度はヒラリーのところへ行つて、彼の奥さんと一緒にベース・キャンプでお手伝いをするのだという。六月までそこにいて、あとは欧州を廻り、アメリカへは九月に帰る予定だそう。結構な御身分ではある。

酸素なしでマカールをどこまで登れるものか。多分両手、両足凍傷だらけになって下りて来るんでしよう、ともいっていた。

前記のハウストンの発音を念のためにきいてみたら、ヒューストンという人も多いが、本人はハウストンといっていますよ、といて笑っていた。

オーテンバーガーは三十一才といふのにまだ坊っちゃん坊っちゃんして、とてもあんな闘志のある人のように思えなかった。何にしてもブラないところが気持ちがいい。臭みがちつともないのだ。ああいうのが本当の登山家というのだろう。

近頃、東京も世界の交通の要衝になり上ったせい、地球を股にかける登山家の往来が前よりずっと賑やかになった。われわれも大いに彼等とつきあって、素直な登山家になるよう心がけよう。

なお、オーテンバーガーには「山日記」を一冊寄贈して「アメリカ」の部の欠を補って貰うことにした。来年のには間に合わないかも知れないが。

(一九六一・一・一八)

× ×

◇会費納入についてお願い◇
新年度となりました。旧年度会費未納の方は至急お納めをお願いします。

(振替東京四八二九)

ヨーロッパの

自然のこと

井手 貴夫

第7回国際自然保護総会がワルシャワとクラカウとでおこなわれてそれに出席した機会に、ほとんどポーランド全土にわたって旅行することができた。ところが一番楽しみにしていたタトラ山中へのエクスカージョンが雨になって、豪宕な山容を充分に見ることができなかつたのは残念だった。このあたりの家と、また山中のホテルなど、みな木造だが一種特徴のある建築風で興味をひいた。雨の中を一行をのせたバスが数台続いで、モルスキーオコという氷河湖に行つたが、湖畔に着く頃にわずかながら雲があがって、頭上高く見える雪溪の上に、六七頭のかもしが遊んでいるのを見ることができた。

バスの中で、隣席にいたドイツの森林局長が、こうした自然公園の中に、自動車道路を通すのは問題だ、我々なら通さない、といったのは非常に深く心をうったが、しかしこれは文字通りに全部が全部そうとはいえないようだ。ハンブルクとハンノーヴァとの中間にあるリューネブルゲル・ハイデという自然保護公園ではたしかに一般の自動車を通さない。公園内に住む村民の自家用車以外は、全部公園の周囲に駐車させて、そこから中心まで約六キロ位は馬車によるか、徒歩で行かねばならない。この公園はドイツで最古の、いつて約五六十年前からの自然保護公園で、おそらくドイツでもっとも手入れの行きとどいていて自然保護公園である。しかしその後たずねたプフェルツェル・ワルトも、今度自然保護公園にする計画のシュワルツワルトも、全部自動車で案内された。もっとも、雅趣にとんだ古い村々ではあるけれども、村が点在するところに、自動車道路が通じていないということではヨーロッパではあり得ないことで、そうした本道からはずれたところに徒歩旅行者のための心地よい道が通じているのだから。プフェルツェルワルトでは、フィヒテの森林の中を三時間ほどそうした道を歩く機会を得たが、美しい村から村へそういう道を歩く旅はさぞかし楽しいだろうと思われる。

× それに、どこいなかへ行っても、心地よく清潔なレストランがあるのはありがたい。ことに、リューネブルゲル・ハイデではいわゆる青年のための簡易宿泊設備がじつに行きとどいていて、かつ立派な図書室があるのには感心させられた。しかし日本でこんな設備をしたら、図書の保存だけでも大変な心配をしなくてはならないだろう。

× 自動車を通さないということでは、自然保護地域は元来そうあるべきである。ライン河の昔の流域の自然保護地域も、ほんの人ひとり通れるくらいの細道が通じているだけだった。スイスという国は国中国立公園のようなものだろうと思つていたら、現在はエンガディンにあるだけである。そしてこの国立公園は風景の美しさよりも動植物の保護を主眼にしているの、道というのもその一部に一本の細道が通じているだけで、あとにはほとんど道らしいものはない。

私の行つた七月のはじめには、もう花はそれほど多く見られなかつたが、案内してくれた動物学者が五十倍の望遠鏡をもって来てくれて、彼がそれをすえると肉眼では何も見えない絶壁の諸所にアルプス山羊やかもしかや大鹿などが悠々と横になったり、草を食べているのが見えた。さいごには急峻な斜面に四十六頭の鹿の群があらわれて、何ものかに追われているようにその絶壁を駆け上ると、峯を越えて向う側に姿を消した。もうしばらくするとまたもどってくるだろうと友人はいったが、はたして三四十分もするとまたかけもどつて来た。長年この国立公園の観察をつづけていた友人もこんな大群を見たのははじめてだといつていたから、たつた一日ここを歩いた私はまことに幸運だったといふべきであらう。そのかわり翌日サン・モリッツに行つて、ピッツ・ネイにケーブル・カーで登つたが、はじめは日がさしていたのに、登るにつれて雨になり、頂上のレストランで四時間待つたがついに雪になった。その日のうちにザン・ガルレンに行かねばならなかつたので、あきらめておりに来たが、しかし七月はじめのたつた半日に、太陽と雨と雪とを経験したのも幸運といえるかも知れない。

× サン・モリッツで思いだしたが、所によつては自動車を通さないという一方では、どこでも観光設備がととのつていて、自然保護地域はそういう観光の価値よりも、動植物の保護に重きを置いた場所が選ばれているということ

は、日本の国立公園のように、観光設備も不充分なら、自然保護も不充分だといふどっちつかずは大いに見習わねばならないと思う。

× せっかくスイスに行きながら、山歩きとしてはグリンデルワルトでファウル・ホルンとグロース・シュレックホルンの氷河までとにしか行けなかつたことは残念だった。スキーも、インスブルックでパチャー・マーフェルの二千米台から千米台まですべつただけで、それも下りるや否やラジオの対談放送の吹込み、夜は音楽会という忙しさだった。十二月にダボスに行く約束をし、一月にはオーストリアのスキーに誘われながら、どちらも都合で行けなかつたのは、今思つても残念である。

× 十二月末帰途についてニューデリーからバンコックへ飛ぶ途中、ヒマラヤが見えたけれども、いかにも遠かった。KLMのステュワーズにあればヒマラヤだろうといつたら、多分と答えたのでちょっとびっくりした。だれでもが山に関心をもっているわけでもない、と思ひかえしはしたが。

(一九六一・三・一〇)

筆者は北大山の会々員

ウエストン氏と有明山
に登った半時の思い出

石田孝和

△挿図は写生帖の一部、原寸約24cm×34cm V

有明山は日本アルプスの前山で、松本平からは富士山に似ているので、信濃不二と言つて此地方では親しみ深い山だ。有明神社は南安曇郡有明村宮城にあり、奥社是有明山の頂上にある。いまは忘れられているが、明治時代は講中もあつて登山者も沢山いた。中房温泉はこの山の裏側にあつて、中房川沿いの細道を登つて行つた。

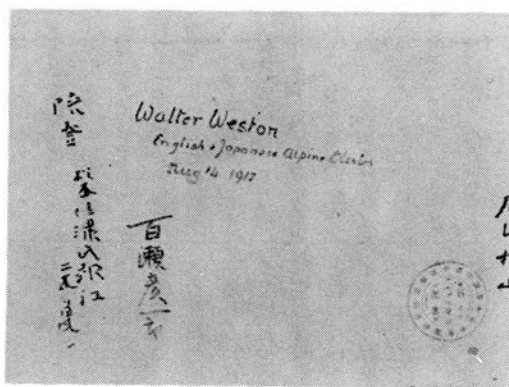
わたくしは大正元年八月上旬、明治大帝崩御の数日後、美術学校の友数人とこの温泉に滞在していた。宿のすぐ上が有明山で、猿も沢山いて下からよく見えた。猿が移動するときは樹葉が波のようにゆれた。

×

八月十三日に中房高原で写生をしていると、下から一人の農夫をつれた西洋人夫妻が登つてきた。この人がウェストン氏であつた。当時は山案内人は無いときだから、妙義山の案内人を連れてきた。

翌日、ウェストン氏は、奥さんを宿に残し、有明山へ登ると聞いたので、わたくしは進んで同行することにした。一行の面々は、ウェストン氏、妙義山の案内人、温泉宿の若主人百瀬彦一郎氏、松本の信濃民報社（今はない）の二木亀一氏、写真班の小

沢某氏とわたくしの六人だつた。そのときのウェストン氏の服装は、薄い緑色と白の縞のワイシャツ、玉虫色のズボ



ン、緑色毛糸の靴下、赤皮の靴、パナマ帽を黒い紐で後にぶらさげていた。その姿がいまでもありありと浮ぶ。年令は五十才位の立派な紳士だつた。山へ登るときは「六根清浄」と唱えて歩かれた。またわたくしに

「あなたは日本山岳会員ですか」

と、日本語でたずねられた。途中二回ほど休んで、頂上の神社の傍の岩の上に腰をかけて四方を眺めた。

そのとき、わたくしは自分で作つた土佐紙（のべ西）の写生帳に筆を出して、サインを頼んだところ、

「ウォルター・ウェストン、イギリス山岳会、一九一二年八月十四日」と英字で書いて下さつた。

百瀬氏、二木氏にも書いて貰い、わたくしも石田探山と書いた。（その後、石田吟松と改名した）

×

宿のわたくしの部屋は二階で、その向うの下の座敷にウェストン氏が居られ、奥さんは障子のかげに居られスカートをすこし見え、ウェストン氏は畳に肘をつき、足を曲げて横になってビールを飲んでおられた。

なにしろウェストン氏がこれほど有名になるとは思わないのと、約五十年前のことの中々思い出せず、そのときの友人三名ほどに問合せてみたが、皆記憶が薄らいでいる。そしてそのときの一人が、向いの二階に植物学の池野博士が泊つて居られ、おたずねしたとき、宿の主人百瀬亥之松氏か池野博士のどちらかが、ウェストン氏の山岳の高さを書いた紙を見せて貰つたといわれた。

×

当時の中房温泉は、ごく質素な山の湯で、賄と自炊とあつて、わたくしどもは自炊で、毛布一枚いくら、蒲団いくらかと借り

質を出し、灯はランプ、薪は使いほうだい、味噌汁は宿で作つて貰い豆腐が入つていた。それで部屋料共一人一日、十六銭であつた。こんなに安いので毎年行つては十日以上も泊つていた。それで御主人とも親しくなつて、東京へ帰つたら中房に別荘を建てたい人があつたら土地はいくらでもあげるからすすめてくれ、とたのまれたので、知人に話してみたら、その当時は応ずる人はなかった。それに湯は豊富で、滝の湯、せんきの湯、むし風呂、野天の湯、内湯、その他到るところに湯煙が出て、それに箱を置き、「ザル」に玉子や、お饅頭を入れると、すぐに蒸せて、とても楽しかつたことを憶えている。

×

その次に行つたら中房の川上に自家発電の設備をして電灯もついていた。また値段も一日二十銭、三十銭にはね上つた。燕岳にも道の無いところを二回、中房の使用人に案内してもらい、日帰りとおとの一度は岩の下で、一晩中は松を焚いて野宿をした。山には雷鳥、山カラスもいたが、人を知らないので逃げなかった。また駒草もあつた。

×

大正六年八月十六日から慶応山岳部の、いまは故人となられた柏源一郎氏、清金治氏と一緒に中房の使用人に食料その他を持たせて、燕岳から為右衛門の吊岩、屏風岳、蛙岩、大天井を経て、二俣小屋に泊つた。

小屋は石を積んで三四人位、やっと泊れ

るほどの広さであった。翌日、常念岳の頂上へ行き、二之俣の沢を下って檜沢の入口、無人小屋に泊り、十八日には檜沢から赤沢小屋という大きい岩の半分えぐれている前を通って、雪深などある溪谷から檜ヶ岳へ登り、頂上で柏君は写真を撮り、その日の中に上高地へ下り、五千尺旅館に泊った。

中房を出て上高地へ来る途中、ただ一人の西洋人にあっただけで、わらじの切れたの、煙草の空き袋など、人の使った物が落ちていると、安心感が湧いて心強かった。山小屋に泊るときには一晩中焚火をするので、薪木を切ったり、食事の用意をせねばならぬので、十分に早くから仕度をした。また登山靴の無いときなので、わらじを一日に二足くらいの割合で持参した。わらじは一足一銭か一銭五厘だったと思う。

上高地には清水屋と五千尺旅館と二軒で、清水屋には外人の男女が何人か泊っていた。五千尺旅館にはわたくしどもだけであつた。十九日には焼岳へ登り、また五千尺旅館に泊り、二十日に徳本峠を越えて島々へ出て、馬車で松本へ帰ってきた。

その後わたくしは日本の各地を写生して歩いたが、支那大陸にあこがれ大正八年に大連へ行き、満州各地、朝鮮金剛山、南北支那を遊歴して、三十年間あちらで生活し、今次の敗戦により、昭和二十二年三月末、郷里松本へ引揚げてきた。

そして何十年ぶりに見る日本アルプスのすばらしい山容に接し、二十四年と二十五年と二年続けて半月くらいずつ夏の高山

地、檜ヶ岳その他へ登った。昔と違って賑やかなことに驚嘆した。

また昨年六月のウェストン祭には、いま住んでいる木曾の寝覚から参加したが、十年ぶりに見る上高地は、旅館も立派になり、梓川の畔の落葉松の大きくなったのにも眼を見張るばかりであつた。その上、若い婦人の登山熱にも感嘆した。

(三六・二・一三)

石田吟松画伯を寝覚に訪う

横内 斎

わたくしが石田吟松画伯のお名前を耳にしたのは、昨(35)年の四月の終りであつた。偶々ウェストン師の名刺を手に入れた頃で、その日研究所を出たわたくしはいつものように木曾福島町の千村書店へブラリと入って行った。この店の主人公は、重豊君と言って、わたくしの四十年來の友人である。

折からサクラの花も散りしいて、春のたそがれを思わせる頃だった。店には丁度ご子息がおられて四方山話の末、隣町の上松の寝覚に石田吟松という画家がおられ、その人はウェストン師と大正のはじめに有明山と一緒に登り、師のサインをもつておられ、同行した時の様子をスケッチされていると話された。わたくしはウェストン師の名刺を手にした直後であり、非常に興味をおぼえてぜひお訪ねしたいと思つた。

×

たしか五月の中ば頃だったと思う。何の前ぶれもなく、そこそ突然画伯のお住居を訪れた。バスにゆられて寝覚につき、村の人に聞くと、ああそれは上松中学校裏(北)の小さいまりした。ただ一軒だけ瓦葺の家だからすぐわかると教えられた。このあたりは駒ヶ岳からでる滑川の汎濫で大きな花崗岩塊が畳たしている。そんな石の中に画伯の家は静まりかえっていた。十坪内外の庭があり、野草がびっしりと植えられて、色とりどりの花が咲いている。わたくしは玄関の戸をあけて土間に立った。案内若々しい応答があつて小柄だが特に眼に特徴のある画伯が立つて來られた。来意を告げると「まあ、まあ」というので先に立つて画房へ通された。

画伯は蓬萊山らしい大幅の密画をものしておられた。中国から持ち帰られたという印材や小さい仏様がキチンと沢山ならべられていた。お茶をいただきながら関係のスケッチブックを拝見し、ウェストン師と有明山へ同行されたときのお話を伺った。何にしても大正元年八月の話で、五十年も前のことだから記憶もうすらいだと前置きされて、当時のことを話して下さった。

以下、概ね画伯の記述と重複するのを避けるため省略するが、当時は高瀬川には橋がなく、舟渡だったということ。この頃は西洋人はきわめて少く、まして中房の山中に夫人まで連れて来るなど驚くべきことだったので、スケッチブックを出してサインを乞うた所、喜んで画伯の矢立をとって署名してくれたこと。有明山登山中、

師は倒木の上にまたがって休まれ、頂上に行つては大岩の上に登つて四辺を眺められたということ。道々「六根清浄」と唱えられたこと、などのお話を興味深く伺った。(ウェストンが頂上で休まれた大岩は、いまは有明山神社の奥宮を祀つてあり登ることもできないが、以前は宮は確かにこの岩の下に平地にあつて、登山者は自由に登れたことを覚えている。)

×

わたくしは、これが最初の画伯との面会であつて、これから後五、六回邪魔をしているが、古稀をすぎた(明治二十一年三月十五日生れ)画伯は、いままなおきわめて健康で、画室でないときは、庭いじりをしてゐる。ただ一度だけスケッチで外出された時に行きあわせた事があるが、この時は奥様から在満当時の苦心談を伺った。思いがけない所に、思いがけない方がいるものだと思つたわけである。

(筆者は京大・木曾生物学研究所勤務)

△編者付記▽

本稿は、横内斎氏ならびに、上松在住の会員下平春渡氏、本会信濃支部副支部長清水悟朗氏のご尽力により掲載の運びとなったものです。石田画伯の写生帖は同画伯のご厚意で、有明登山の部分五枚が、下平春渡氏により撮影され、水ガととも本会に寄贈されたもので、本号には署名の部分だけを掲げましたが、いずれ残りは山岳に収録される予定です。因みに右等生帖は土佐紙全三十枚綴です。

☆本稿冒頭の署名は、左から附登、松本信濃民報社二水亀一、百瀬彦一郎、中央にW・ウェストン。右端に石田探山とあります。円形スタンプは丸の中に、信濃国南安曇郡有明山、中房温泉場、日本アルプス登山記念と記してあります。

金 坂 一 郎 著
冬 山 技 術 セ ミ ナ ー
を 読 ん で
○
谷 口 現 吉

金坂一郎様

「冬山技術セミナー」御惠贈に預り、厚く御礼申し上げます。旧う折井さんから、書評を書けとのお話があり、ついうっかり書いてみましようとお引受けして、しまった、と思い返したのでしたが後の祭でした。重ねて編集係からいわれ、兄からいただいた賀状にも、忌憚なくものを言えと、とどめを刺されては如何とも為し難いところです。この山登りの老書生は、いつも兄達の集りに顔を出せば、勝手な放言をこととしていますが、あらたまって技術書の批判などということになると、いささか実面から遠ざかりすぎている自分に気づき、まさに身のほど知らぬたぐいと、忸怩（じくじ）たるものを感じます。そこで真正面からの書評などでなく、兄へのお礼状を以て、併せて会への責を

も果させていたこうと考えついた次第です。兄と会の各位へお許しを得たいと思います。

☆

兄のこの著の執筆の動機は知るよしもありませんが、若い登山者への愛情と、健全な登山者育成の悲願に裏づけられたものであることを紙背に強く感ずるのは、決してわたしだけではないでしょう。

あくまで、実際に即した角度から説き入りながら、かならず正確な科学的裏づけがそこにある、という著述の態度は、今日までの類書とは自から格段の差異があり、これあるかなと感ずる次第です。

特に、たとえば、雪について説くに当り、降った雪がいろいろな経過をたどって、ついに地上から消え去って行く過程を、その経過に従って、あらゆる角度からとり上げていくという方法をとり、雪崩では、いわゆる分類のための分類に堕ちず、実際に即した混合型という捉え方を試みて居られる点など、立派な成功であったと思います。

雪崩の遭難については、身を以て体験された後輩の人たちの二つの例を詳述し、一は木下氏の言（九二頁）をかり、一は自ら九十九頁以下に結論づけをして居られますが、ともに後輩たちの決定的

失策に対する温かい心情と、併せていささかも妥協するところのない峻厳な批判とを兼ねた名言と拝読しました。

今日、とかく新聞紙上などで見る遭難批判に、無責任、皮相的な常識論が多く、苦々しく思うことが多いだけに共感の念を禁じ得ないものがありました。ただ、穂高の場合は、うっかり読みすごしてゆくと、あるいは急行列車の前を承知で横切することを容認されているかのごとく、誤り読むものもあるのではないかとおそれます。如何でしょうか。

本書の至るところで触れて居り、時にこの章において決定的な言及をして居られる。「今日の若い登山者達の登攀する能力と、危険等の判断のために必要な登山における総合判断能力との、著しいずれ」については、わたくしも年来同様なことを考えてきた一人です。戦後数年の間、たまたま今兄が立って居られるような立場で、会の学生部の人たちに接してきたわたくしが、声を大きくして警告し続けてきたところも全くここにありました。なんら成果らしいものをあげることができず、バトンを次の人たちに渡してしまいましたが、今日兄の所論を拝見してまことに喜びに堪えない次第です。



図書紹介

上田哲農氏作

ネパール関係新刊書

(一) バジューラチャリア夫人編「ネパール」(一九六〇—六二)と
(二) プラディウムPカラン博士著「ネパール」(人文及自然地理)
ネパールについて手ごろな参考書が待望される折から、手引き書が二冊出版された。

×

(一) 前者はトレード、アンド、インフォメーション、ディレクターと副題があり、政府の半官的出版物と思われる。全篇を概説、行政組織と対外関係(条約文をのせる)、第一次五ヶ年計画(商工業、貿易、鉱業、財政、主要商社一覽、関税率表を含む)旅行案内(各地の案内と内地登山旅行の注意等)に分つほか、祭日について一章を設けているのはほほえまし

い。

説明や注意や資料や表を手あたり次第に並らべた気味があつて、参照するのに少し骨が折れるが、現地に出かける人にとっては、有用な参考資料を含んでいる。このうち旅行案内の部だけ別冊として刊行されている。

本書も別冊も本会の図書室に備付けてある。

×

(二) 後者はケンタッキー大学のカラン博士の手に成る横長の大幅で、フォード財団の援助をうけ同大学から出版された。歴史、政治行政、地文、気候と植物と土地、土地利用と農業、住民、文化の多様性、疾病、鉱業と動力と工業、運輸と交易、地理的区分の十二章にわかれ、全頁大の図表三十五、本文中の挿画写真六〇をのせ、各章末に参照書目、巻末に参考図書の簡単な解説がある。

序文によると、著者は広くネパール国内を歩るいて調査し資料をあつめた由であるが、ネパールに永年在住し、その著作が本書にたびたび引用されているトニー・ハーゲン博士の直話によれば、同博士は著者とネパールで会ったことがなく、内地を旅行したことも知らないし、本書所載の田舎の写真の殆ど全部は同博士のものを転↓

☆

きつともうこの辺で、会報係から与えられた紙数は尽きているのではないかと思うのですが、もう少し続けたいと思います。

それは兄とわたくしとが見解を異にしているのではないかと思われる点があったからです。それと、もし改訂の機会があれば、加えられては如何かと思う点についてです。

兄が序論(十頁)で、『登山に於て承知の上で危険限界すれすれに近づくことは許されない』と言われているが、わたくしは、『承知の上』を『知らずして危険限界すれすれに近づくことは許されない』とするか、あるいは『登山に於ては、承知の上である場合に限り危険限界すれすれに近づくことが許される』と申したいのです。

わたくしを以て言わしむれば、承知の上で、すなわち貴兄の言われる余裕の判断を、自ら何者にも捉われることなく、堂々と決定し、——つねに危険限界すれすれまでアドヴェンチャーの領域を拡げること、——がスポーツとしての登山(これのみがスポーツ登山の全てとは言わないが)の真髄であらうと思うのです。

ことばをかえて言えば「つねに

余裕を無限小に近づけることにはあらゆる努力を献げること」こそわたくしの信奉するスポーツ登山の在り方である、という意味です。

あるいは、わたくしの読みちがいであって、兄の言わんとするところと同じことなのかも知れません。或は根本から異なる所論かも知れませんが、一寸わたくしは知りたく思うのです。

十一頁において、『登山行動に於て余裕をどの位残しておくか、これは面倒な問題である……』と言われながら、さらに深くこれに触れられるところがないのは遺憾に思います。この「余裕」の判断、選択、決定こそ登山技術の最高の分野に属する問題と思うからです。もっと沢山の紙数を費し、うんとつつこんで「余裕論」を展開していただきたいと思うものです。しかも余裕論も他の章におけるごとく、あくまで実際の具体的な角度から、これを展開されれば、素晴らしいことだろうと思います。

次頁で、『登山がスポーツであるならば、登山者も全力をつくして登って差支えない』とありますが、これは、『登山がスポーツであるならば、登山者は全力をつくして登るのが当然である。しかし全力という言葉は単に……』と改めていただけないでしょうか。こ

の章のこれから後の部分は本書の中でも、わたくしのもっとも共感するところの多い部分ですが、『登って差支えない』という表現に、子供っぽい憤りのような抵抗を感じました。これは勿論、単に表現だけの問題なのです。暴言をお許し下さい。

十七頁に『本書の目ざすところは、雪山の見方と歩き方……』と明言され、生活の面には一切ふれて居られません。しかし前々頁には、登山技術を分類して、『山の見方、歩き方、山での生活』、と言われているので、この面についても、兄の豊富な経験を披瀝していただきたいと思います。日本のような多雪地帯の雪山での生活は、生活自体が「術」と名づけてもよい、幾多の知恵を必要とするように思うのです。

それから細かいことですが、登山技術のさし絵は、冬山装備のものであった方がよいのではないのでしょうか。

ずい分勝手なことを言いました。勝手気儘に。それでもまだなにか言いつくせぬ気がします。一度ゆっくりお目にかかって、お話をしてみたいと思います。

では妄言をお詫びし、兄のご健闘をいのりつつ擲筆します。

▲傍筆筆者 V (一九六一・一一)

↓載したのであるという。著者は

序文で多くの名前を挙げて謝意を表している中にも、博士の名は出ていない。何かいきさつがあるのかも知れないが、念のため附記して置く。とまれこの本は、現在ではネパールに関する唯一の総合的地誌と思われ、大へん便利な参考書である。たゞカトマンズ谷の素図だけで、全国にわたる地図が付いていないのは、ネパールの地図が入手困難な折柄、物足りなく感じられて惜しい。

ネパール(一九六〇—六一)

二四・五×一八耗、二六五頁、

ネパール・トレディング・

コーポレーション(ニュー・

デリー)発行、価五ルピー(二

五志)なお Perkins Oriental

Books(京都中京局私書函二

四)がアッリシェットと書いてあるから同店を通じて入手

出来るだろう。

ネパール(人文及自然地理)

二七×三五・五耗、一〇〇頁、

ケンタッキー大学出版部、価

不詳

(日高記)



高橋定昌氏作

イタリヤ山岳会会報

— Rivista Mensile —

第 79 卷 9—10 号

ベルギーのアルデンヌ登攀学校の記事と、大戦中インドの俘虜収容所に居たイタリア将校が、近くのダールムサラ・ドーラ・ダール(パンジャブ・ヒマラヤ)地方に登山を敢行した記事について、「日本の六遠征隊」と題し、カンジロバ・ヒマール、ヒマラルチュリ試登、ダウラギリ偵察、ゴリサンカル偵察、ランタン・ヒマール、アウサンガテ登山について本会から提供した各隊長の手記を訳載し、写真五葉のほか、中央ネパール・ヒマラヤとダウラギリ、ゴリサンカル一帯およびアウサンガテ附近の略図を添えて紹介し、また新刊紹介欄では山日記一九五九年版の目次をくわしく記したうえ、日本の登山家はその教養と技術について恰好の資料を与えられていると評している。

(日高記)

九州の春山

☆

折元秀穂

本格的な冬山を持たない九州の岳人たちが、雪を求めて、スキーを担いで九州を留守にしているうちに、ふと気がついてみると、三月四月は何時の間にか過ぎて、のどかな春の山が待っている。

われわれがまだ春山に名残を惜しんでいる頃、阿蘇や九重を中心にする放牧帯の高原の野焼が始まる。何日も燃え続ける原野の衣替えはわれわれに九州に帰れと呼びかけているようなものである。近代的な登山の在り方からすれば、冬山のない九州の山に冬の間だけお別れするというのも止むを得ないことかも知れないし、当然ともいえるだろう。

それが五月の山行きを最後に、久し振りに故郷に帰ったような気分分て山々を歩きまわる。九州の代表的な山岳が、阿蘇であり、九重であるといわれるが、それは火山

特有の女性的な山容と山麓の高原美にあると思う。しかし春の新緑の頃の九州山脈地帯、祖母、大崩、九州の脊梁の山々などは、捨て難い良さを持っている。これ等の山々は火山帯の草原的なものと対象的な、黒々とした原生林に被われ、深く刻み込まれた渓谷は美しい岩床とともに登攀の対象ともなり、白樺も唐松もはい松もない二千米に満たない山ではあるが、思わぬ苦労をしたり、或はまたひなびた山村の人情にふれて、しみじみと九州の山を味わうことも出来るだろう。

新緑の頃の原生林には秩父の山々を想い、南アルプスのような山頂附近の露岩帯も見ることが出来る。山肌の色が変わる程のあけぼのつじを探索するのも四月から五月にかけての楽しいプランでもある。

たゞ残念なことは、最近これらの山々が、毎日のように伐採されて、原生林が少なくなつて行くことである。われわれにとつては実に淋しいことである。

勿論あらゆる点で、九州の山も変わりつゝある。高原中には新しいバス道路が建設され豪華なホテルが建ち並んで九州の山全体が観光地になるのではないかと気にもなる。山小屋やキャンプにキーパ

富田治三郎を偲ぶ会

奥秩父雲取山の鎌仙人とよばれて三十二年間、登山者に親しまれた雲取山荘の富田治三郎氏（本会々員）が病没してはやくも一年を経過したので、去る二月十七日、秩父鉄道、本会東京支部、秩父山岳連盟、奥多摩山岳会、秩父多摩国立公園山小屋管理人組合が発起人となり、体協ホールに於て故人追憶の会が開かれた。

当日は、法華の法衣姿の富田未亡人も出席され、本会からは神谷恭、中村謙、瀬名貞利、折井健一、坂倉登喜子、大貫菊子、横山厚夫、友野正雄、古沢肇が出席し三十名の参会者は、奥多摩山岳会真鍋健一氏の司会で故人を偲ぶ追憶談に早春の一刻を過した。

中村謙氏は、追憶の中で故人が不用意な登山者を叱りつけて下山させながら、ひそかに鴨沢まで後をつけて、無事下山を見届けから帰ってきた、といういかにも故人らしい話をされた。その他、神谷恭、原全教、坂倉登喜子、大菩薩峠勝縁荘主人益田勝俊氏らの思い出話があり、新島章男氏から故人の遺業顕彰についての提案があつて、散会した。

(F)



会員通信

上田哲農氏作

カラチにて

斎藤健治

二日に発つてマニラ、バンコック、ラングーン、カルカタ、デリー、カトマンズ、そして当地へやってきました。暑いところ、涼しいところ、寒いところと色々です。カルカタではその人間臭に驚き、というより嫌悪を感じました。そして早くネパールへと思いました。二十二日、七時半、IACでデリーを飛び出しました。

一度飛び立ってバックしたので、カトマンズには十一時三十分に着きました。途中デリーからカトマンズへは大ヒマラヤに沿つて飛ぶのですから何んとも言えません。いままで日本隊は多くカルカタから飛びあまりデリーからは飛ばなかったそうですが、まっ

たく庄倒されました。目の及ぶかぎり白銀の山波でした。

飛行場には日高会長と大使館の連絡で神原達君が迎えに来てくれました。同君には大いに世話になりました。翌日はカニの丘へシエルパのアンツェルン五号とそれにイタリア、ドイツ、イギリスの三青年を伴い、神原君の案内で出かけました。ランタン、ジュガル、それにアンナプルナまで眼の前にして午睡しました。小生の今回の旅のクライマックスでした。

(一九六一・二・二六)

早春の富士

中保

石原憲治君先生のお招きで、会員の荻野和夫君と私の三人で、早春の富士に登りました。

三月六日、午後一時半、御殿場の富士測候所に集り、ジープで太郎坊まで行き、その日は二合八勺の避難小屋に泊りました。

あけて七日、快晴に恵まれ、雪の状態もよく、風も三千米をすぎの頃までは春日和といったのどかさで楽しい山登りができました。その日は、頂上観測所に泊り、八日下山しましたが、石原先生は十六才で、なお元気盛んなのには頭の下る思いでした。

ーを残さないと盗難にあうとか、若いハイカー達が土地のチンピラに食糧を強奪されたとか、聞くだけでも嫌になるような事も起っているようである。しかしそのようなことは余り考えないことにして、われわれは、われわれの山を楽しむためのものである。

×

野焼きの跡に新しく芽をふいた草原は美しい。それは九州が持つ南国の牧歌的なものであって、九重、阿蘇、霧島のような火山地帯では山稜を歩いていても、優しい女性的なものを山肌全体にうけて、荒々しい山靴では気がひけてならない。

しかし吾々は阿蘇の岩場には、ザイルを担いで出掛けて行く。此所は単なる岩の練習場としてではなく、一つの山行きとして心をひかれるのである。

こゝはその標高が如何に低くとも、その規模がどんなに小さくとも、われわれの心を捕えて止まないうものがある。それは阿蘇が持つ草原の美しさと岩場である。



草原の中のキャンプサイトは、はたしでも歩ける短い芝生で囲まれ、平の山小屋も附近に燃料にする薪は無くとも、岩場を望んで山を語るに良き根拠地である。その上の岩場がどんなものであるか等は最早問題ではない。われわれはアルプ的な高原を歩き、其所に生活して、高岳と云う阿蘇山の盟主に登る一つのルートとしての岩場を選んでいくのである。

昨年の蔵王での小集会とのき、この二二回の現地小集会を福島県支部が主催をお引受けいたしてから、当支部に全国より多数の岳人をお招きして会合をもてる光栄と重責を痛感して、昨年末以来何回となく役員会を開いて受入態勢を協議いたしてまいりました。当支部として最も頭をなやましたのは、開催地を何処にするかでありました。

二二回現地小集会報告

福島県支部長

伊藤彌十郎

吾妻小舎、家形ヒュッテ、高湯ヌル湯の四案を幾度も検討を重ねまして、次の理由により、ヌル湯を開催地と決定いたしました。

一、混雑を離れて、むかしのままの吾妻の姿をお目にかけられること。
二、高湯温泉より三時間前後の行程にあり、交通、通信が他に比べて比較的容易なこと。
三、ツアーの場合、ヌル湯―吾妻小舎―東吾妻―吾妻小舎が一日行程で充分に時間の余裕があること
四、その他の事情。

を得、この小集会を大過なく終えることができました。以下当日の模様を簡単に記してみます。

二月十八日、福島駅前発八時のバスを最初に参加者が続々と高湯温泉に到着いたしました。熊本の三谷支部長さんは三日前から高湯にお泊りになり、スキーをお楽しみに居られました。

吾妻屋旅館にて九時から受付を開始して、受付のすまれた方は出発時間までご自由にスキー場で遊んでいた。

午後一時、全員高湯を出発して、ヌル湯に向かう。この頃より雪が降り出しましたが、幸い無風なので大変助かりました。

ヌル湯、高湯の標高差は約二百米で、途中大きな渓谷を二つ渡らなければならず、全員シールをつけ、日高会長さん、大分の永井支部長さんは仲よく二人輪カン組で、ヌル湯まで一汗かいていたことができました。

今年には例年になく積雪量が多いが、大体予定の時間までに全員元気にヌル湯に到着いたしました。ヌル湯付近の積雪量は約二米位。夜、小集会、続いて懇親会。

△今回の参加者▽

日高会長、野口末延、松本熊次郎、村井米子、千谷杜之助、森敦彦、山口一孝、池田光二、小野利

次、藤野欣也、朝井一男、(以上本部関係者)

三谷孝一、永井清一(以上九州) 登坂信雄、渡辺昌一郎、坂本雄吉(以上、宮城県)

福島支部より伊藤支部長以下二十四名、計四十名。

伊藤支部長より遠来のお客さんへの歓迎の辞に続いて、日高会長さんより丁寧なご挨拶を頂いて愉快な一夜を過ごしました。

二月十九日、早朝、現地小集会を解散し、午前九時、日高会長さん以下数名は、前日のコースを高湯へ、地元会員の数名は水保方面へ下山、ツアー希望者は二十名ほどでありましたので福島県支部員がご案内申上げ吾妻小舎へ出発、無事この小集会を終了いたしました。

×

今小集会につきまして、当支部としては何かと至らなかつた点を反省して、これを他日の役に立てたいと思つて居ります。

末尾で恐縮ですが、遠路はるばる九州よりご参加下さいました三谷、永井の両支部長さん、

ご高齡にもかかわらず、カクシヤクとして雪深い東北までお出で下さいました会長さん、ご多忙中を紅一点をそえて下さいました村井先生には厚くお礼申し上げます。

FOUNDED 1905



日本山岳会
JAPANESE
ALPINE CLUB

佐藤久一朗氏作

会務報告

二月理事会 二日ルーム

▽日高会長、三田副会長、理事渡辺、折井、山崎、村木、木下、古沢、田村、徳久、川上、監事野口、評議員成瀬
▽議事

①山岳協会役員会(二月三十一日)の報告 (渡辺常務理事)
・第十六回国体登山秋田県開催について
・全岳連としては指導者講習会を年二回開きたい。
②ヒマラヤ・アンデス遠征についての外貨獲得について

(村木理事)

・大阪大学、大阪市大については三十五年度分として許可される。
一橋大学、関西学院大については三十六年度分として許可がおりる見込である。
・外貨については一年前に割当を行う必要がある。

・外貨の割当について山岳関係は体協、文部省のどちらか一本にしぼってもらいたい。

③英国山岳会長老ロングスタッフ氏を本会名と会員に推せんについて

(成瀬評議員)

・現在の名と会員・長老・評議員に諮って慎重に決定したい。

④来年度役員について

(折井常務理事)

・現在会長、副会長を入れて十八名なので二名増員し定員の二十名とする。

三月理事・評議員会 二日ルーム

▽日高会長、理事折井、浜野、太田、村木、徳久、日下田、高橋、川上、加藤、古沢、監事野口、評議員深田、織内、高山信濃支部長、委任、金坂、木下、今西(錦)、今西(寿)、永井大分支部長
▽議事

①新年度役員改選について

(折井常務理事)

②会員総会について

(折井常務理事)

・期日、四月二十二日(土)午後二時
・場所、体協会議室
③基金設定について
(折井常務理事)
・五〇〇万円の基金を集める必要

あり(年末より施工の体協会館改築に伴い、山岳会ルームの移転が必至となるため)

④西穂高登山技術者講習会について (日下田理事)

・予算の増額と日程の説明

⑤吾妻山における第二一二回現地小集会について報告

(日高会長)

⑥東京外語大蒙古遠征の後援依頼について (折井常務理事)

海外登山隊歓迎会

▽日時、36年2月9日(木)6時

▽場所、ポールスター(新丸ビル地下)

× ×

▽出席者氏名

・女子ヒマラヤ登山隊

・細川沙多子、岡部みち子、浜中慶子、奥川雪江

・大阪大学ピーク登山隊

・篠田軍治、山本信綱

・大阪市大ランタン・リルン登山隊

・森本嘉一・広谷光一郎

・ビッグホワイトピーク登山隊

・梶本徳次郎、番場宏明、中野満、山田隆保

・関西学院大学ペルーアンデス隊

・川村大膳、藤本高嶺、南井英弘

・一橋大学アンデス登山隊

・吉沢一郎、甘利仁朗、中川滋夫、倉知敬、丸山則二、中島寛、高崎治郎

×

・大貫太市、小原勝郎、茶谷東海、松本熊次郎、片山全平、佐藤久一朗、藤本九三、武田文男、川崎隆章、藤島敏男、福田嘉四郎、三田幸夫、永井清一、中保、竹田吉文、深田久弥、土田新一、村尾金二、山本朋三郎、川森左智子、福永文雄、杉山孝、近藤茂吉、石原憲治、木村碩志、池田光二、岡壁徳之助、渡辺公平、山下一夫、折井健一、日高信六郎、村木潤次郎、高橋進、津田周二、入沢文明、青木昇、川喜田二郎、山崎安治、寺阪元雄、賀川浩、曾根原恵夫、大賀寿二、北野一彦、島田巽、中村保、坂本矩祥、古市美津雄、仲徳二、横有恒、モンナ・ダリオ、竹田寛次、織内信彦、中山沖右衛門、神谷恭、諸岡一次、見学玄、牧野四子吉、牧野文子、田島汎、広羽清、吉阪隆正、海野治良、村井米子、大森明悦、三枝礼子、福原健司、近藤隆治、辰沼広吉、金子賢三、大塚博美、松田雄一、芳野起夫、チャールスボーデン、鈴木淳平。

以上九十七名

日高会長の挨拶、近藤茂吉氏の

音頭で乾杯をし、ついで各登山隊長より挨拶並に登山計画の説明があり、藤島評議員の閉会の辞があつて午後八時盛會裡に散会した。(高橋進)

東京支部報告

池ノ平スキー講習会感想

森川裕子

煤煙の東京へ帰って数日、雪煙をあけていた妙高の山々と気持ちよくスロープの白さが、ますます鮮やかに目の前をちらつきだした。何も彼も、本当に楽しく快適だった。

何度も滑っては静かに説明して下さる先生のお話はとてもよく判るけれども、どうも出るのは溜息だけだ。今迄は時間のないのを口実に、楽しめばいいのだからと、やたらに滑っていたのがくやまれる。

設備の整った宿舎、広い粉雪のゲレンデ……講習会の雰囲気は予想以上に快適で、この講習会の三日間の経験は忘れられないものとなった。

東京支部懇親山行

一、期日 3月19日(土)21日(日)
二、場所 高湯温泉・吾妻山
三、係 安彦六郎、関口正二郎

宮城支部報告

支部長 北川正次

二月十九日、福島支部主催の吾妻山での現地小集会には日高会長はじめ多数の参加があり、私は「二日休診のあたりを喰って欠席しましたが、席上、来冬の小集会は宮城蔵王に決定の由で、支部一同大喜びです。昨夜早速支部集会を開き準備を申合せ致しました。また同席上、東北大のリーダーから、同大山岳部員経済学部四年今野隆介君の北穂遭難の中間報告があり、今後の捜索等について相談がありましたので会員各位の御協力を得たく同大学からの依頼状(別紙プリント)をお送りしましたから会報の一隅に御掲載下さるようお願い致します。(二、二一)

(別紙プリント写)

北穂高・滝谷方面へ入る

方々へお願いします

昭和三十五年十一月二十八日、東北大学山岳部員今野隆介(昭和十四年二月十七日生)は他の部員二名と共に槍ヶ岳北穂尾根より奥穂高への縦走中、北穂高溜沢のゴル手前でスリップ、岐阜県側溜谷第四尾根、第五尾根間のルンゼに滑落行方不明となりました。当山岳部では直ちに捜索隊を派遣して

滑落地点よりD沢内部、合流点付近を捜索いたしましたが、ピッケルシャフト、新聞紙、スプーン等を発見したのみで、同人及びその他の所持品は発見することが出来ず、天候悪化のため今冬期の捜索は打ち止るを得なくなりしました。明春より再び捜索を開始する予定ですが、滝谷第四、第五尾根間ルンゼ、及びそのD沢との合流地点より下流において同人またはその所持品らしきものを発見されましたならば、何卒当山岳部まで御連絡下さいますようお願い致します。

なお第四尾根上部の略奪点状の部分よりC沢に入っている事も考えられますので、この方面でも何か発見された場合は同様御連絡下さい。

なおこれらのものを発見された場合、位置を詳しく確認された上、なるべく見取図を作り、また写真をとって置いていただけると好都合です。以上に要する諸経費はのほど返済させていただきます。その他お気付きの点あれば、御教示下さいますよう重ねてお願いいたします。

昭和三十五年十二月二十日

仙台市片平丁東北大学内

東北大学学友会山岳部

主将 斉藤 晃

本号主要目次

- ・ AACK三十周年記念会に出席して……………一
- ・ ヒマラヤ人便り……………二
- ・ ヨーロッパの自然のこと……………二
- ・ ウェストン氏と有明山に登った当時の思い出……………四
- ・ 石田吟松画伯を寢覚に訪う……………五
- ・ 冬山技術セミナーを読んで……………六
- ◇図書紹介……………六
- ・ 九州の春山……………六
- ・ 富田治三郎を偲ぶ会……………八
- ◇会員通信……………八
- カラチにて……………八
- 早春の富士……………九
- ◇二二回小集会報告……………九
- ◇会務報告……………一〇
- 海外登山隊歡送迎会……………一〇
- ◇支部便り……………一〇
- 東京支部報告……………一〇
- 宮城支部報告……………一〇
- ・ 北穂高滝谷方面へ入る方々へ……………二

(二二三号の組み違いについてお詫び)

4頁5頁、「富士山頂氣象観測所員疲勞調査報告書」に組み違いがありましたので、訂正刷を作ってお送りしました。どうぞご諒承下さい。

(二二三号訂正)

- | | | | |
|-------|--------|--------|---|
| 7頁5段 | 誤 | 三國案の | 正 |
| 8頁3段 | 仲保 | 中保 | |
| 12頁5段 | 真写 | 写真 | |
| 13頁4段 | 川喜多二郎氏 | 川喜田二郎氏 | |
| 14頁4段 | 福原健治氏 | 福原健司氏 | |

編集後記

★会報の組み方を横組みにしたかどうか、というご意見があります。官庁の公文書まで左横書きのこのごろでは、会報もやがて改められる運命にあるともいえます。登山用語は云うまでもなく、山名、地名にも外国語が多くなってきたので、むしろ横書きの方が読み書きに便利なようです。★もし改めるということにでもなれば、それは昭和五年十月(第一号発行)以来の形式と伝統とを打破することになるわけで、一つの英断でもあるわけですが、いずれは考えなければならぬ課題ではないでしょうか。

昭和三十六年四月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

法人 日本山岳会

編集者 古沢 肇

電話(神田区)八九五二番

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂